

老人ホームで閉じた人生

下小坂にある「川越キングスガーデン」には、ケアハウス「主の園」と特別養護老人ホームが併設されています。キリスト教会によって建てられましたので、毎朝30分の礼拝が行われていて、私も月一回奉仕しています。出席は全く自由です。施設長さんから、1年前に亡くなられたKさんのお話を伺いました。

彼女はリュウマチの痛みの訴えや、かつての主治医に対する不満や批難や、家族に対する愚痴の絶えない人でした。そのため周囲の人は辟易し、たった一人の娘さんも近寄らなくなってしまいました。しかし毎朝特養の礼拝に参加していたからでしょう。或る時「もう、イエス様を信じる以外にないね」と洗礼を受けました。

すると不思議なことが起こったのです。彼女の口から愚痴や不満が一切出なくなったのです。昔の主治医の悪口も言わなくなりました。そのため娘さんとの関係も回復して、再び面会にいらっしゃるようになりました。激変とはこのことです。誰からも好かれる穏やかな最晩年を過ごし、娘さんに看取られて静かに召されました。

火葬の後、ご家族(二年ほど前まで行方知れずだった息子さんも参列)は、お骨のなかに TENT を止める太い釘のような金具を3つ発見しました。40年前に両肩と大腿骨を手術した時に埋め込んだものです。3つ合わせると2キロ弱あったそうです。今ならもっと軽い金属になっているでしょうが40年前には、最新の医療技術だったのでしょうか。「こんな釘が入っていたのなら、身体が痛むのは当然だ。母はこんな重荷を負って、耐えて来たのですね」と家族は泣きました。そしてその金具をお骨と共に大切に持ち帰って行かれました。

また特養の職員も、それを知らされて、Kさんのあの絶え間ない愚痴や痛みの訴えに無理解だったことを後悔したそうです。40年前の手術で2キロ弱もする3本の太い釘を体内に埋め込まれたのですから、時としてひどい痛みを襲われたのは当然でしょう。そしてそれが医師への不満となって吐き出されていたのですね。

ところがイエスさまを信じたら、不満や愚痴や悪口がピタッとなくなってしまったとは、どうしたことでしょうか。心の持ち方次第で感じ方が大きく変わることは確かです。感謝するとか赦すことで解放されて、喜びが湧き上がり心身ともに新しい状態になります。Kさんもそのような恵みをいただいたのでしょうか。

でもそれだけでしょうか。施設長さんはKさんの**激変ぶり**から考えて、イエスさまがKさんの祈りに応えて、古釘がもたらす**痛み**をも**実際に癒して下さった**に違いないと、語っておられました。そうです。神さまは心の救いだけでなく、病気の癒しの救いをも与えてくださるお方なのです。Kさんは、**身体をも癒していただいた**のです。

頑固な父に寄り添えて

Eさんは夫と教会で知り合い、結婚しました。夫の父は「ヤソの娘か」と言って、式にも出てくれませんでした。長い間疎遠が続きました。晩年になりやむええない事情でこの父と同居するようになりました。家で教会の集りをすると、父は階下でカンカンと鉦を鳴らして大声でお経を唱え始めました。

厳しい冬が終わり、春が来ました。**桜の花見**にさそうと「行きたい」と言うので、車で連れていきました。笑顔でいてくれるので、度々行きました。するとEさんを頼りにしてくれるようになりました。**ガン**が見つかり入院。Eさんは毎日面会に行きました。「俺はずっと熱心に信心してきた積りだが、楽になれないなあ。E子、お前の神さまはどうなんだい」「おじ。私の神さまは、どんな時にも傍に居て下さるよ。辛いこと悲しいこと、どんな事もお祈りすれば、耳を傾けて聞いて下さるお方だよ」

「お前たち夫婦はケンカしないね。息子はお前と結婚してから変わった。キリストの神さまだからかなあ。俺も一緒にいたいな」と言うのでびっくりしました。「おじ、それでいいの?」「そうだ、俺もお前の神さまと一緒にいたい」。それから夫も一緒になって聖書を読むようになりました。父は聞いていて涙ぐんでおりました。

かなり痛みがきて辛くなったある日、何か**様子が変わ**だという知らせで病院に駆けつけました。すると父が目を輝かせて両手を上げて「ああ、高い所に**光り輝くお方**が見える。ほら、お前にも見えるだろう」と感極まっていました。「ああ、おじ よかったですね」とEさんも胸がいっぱいになりました。そして桜散る五月の終わりに召されて行きましたが、その顔は余りに輝いていて、**大平安**でした。「頑固者の父と未熟者の私。でも心を通い合わせて遂にキリストの御許にお送りすることが出来ました」とEさんは感謝しています。

**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。
休ませてあげよう。 聖書**